

対人関係への衡平理論の適用 (2)¹⁾²⁾

—同性親友との関係における衡平性と情動的状态—

静岡大学

諸井 克 英

問 題

Walster, Walster, & Berscheid (1978-a) は、対人関係上の諸領域への衡平理論の適用に関する理論的体系化のために、4つの基本的命題を次のように提起した。人は、本来、自己のアウトカムを最大にしようと動機づけられている(命題Ⅰ)。しかし、集団の中では、集団全体の利益の最大化のために、衡平原理に基づくシステムが作りだされ、制裁的機能をもつ衡平規範が成員に内在化される(命題Ⅱ)。この内在化された衡平規範のため、人は自分が不衡平な関係に関与していることに気づくと苦悩(distress)を感じ、関係が不衡平であるほどその苦悩は大きくなる(命題Ⅲ)。この不衡平の認知は、衡平回復への動機づけをもたらす、その動機づけの大きさは不衡平の大きさに比例している(命題Ⅳ)。

Walster *et al.* (1978-a) が提起した命題Ⅲに従えば、親密な関係においても当事者による衡平性の認知と情動的状态との間には、2者の関係が衡平であると認知している衡平利得者の苦悩が最も低く、自己の相対的利得が過大である過大利得者および過小である過小利得者の苦悩が高くなるという、2次の関数関係が予測される。その際、彼らが利得最大原理に基づき提起した命題Ⅰを考慮に入れると、過大利得者の苦悩が過小利得者のそれよりも少し低くなるという、1次と2次の合成された関係が導かれる。

従来の研究では、怒り(anger)が過小利得者、罪責感(guilt)が過大利得者、満足感(contentment)が衡平利得者の気分の特徴であるという Homans (1974) の指摘に基づき、苦悩の指標として、自他のインプットとアウトカムを思い浮かべたときの4つの気分評定(怒り、

罪責感、満足感、幸福感)の合成得点(満足感+幸福感-怒り-罪責感、TMIと略す)がよく用いられている(Walster, Walster, & Traupmann, 1978-b; 井上, 1985など)。

恋愛・夫婦関係への衡平理論の適用を検討した先行諸研究では、1) 衡平利得者の情動的状态が最もポジティブである、2) 過大利得者よりも過小利得者のほうの情動的状态が少しネガティブである、という傾向が見出されている(諸井・小川, 1987参照)。わが国では、井上(1985)が恋愛中の男女大学生について検討し、衡平よりもむしろ少し過大利得の方向にずれている者が最もポジティブな情動的状态にあることを認めている。

ところで、恋愛・夫婦関係以外の親密な関係への衡平理論の適用可能性を検討した研究がいくつかある。井上(1986)は、2人きょうだいの小・中学生を対象として、きょうだい関係について衡平利得者よりもむしろ過大利得者のほうが情動的状态がポジティブであるとの結果を得た。これは、衡平原理よりも利得最大原理に一致する。また、諸井・小川(1987)は、女子大学生の同性および異性親友とのそれぞれの関係について調べ、次の結果を得た。同性親友では、怒りと罪責感とで衡平理論と一致する傾向があった。異性親友では、交際期間が長期の場合に罪責感で、交際期間が短期の場合に満足感で衡平理論と一致する傾向があった。男女大学生を被験者とした Cash & Derlega (1978) の研究では、異性のカップルについて従来から指摘されている身体的魅力度の一致傾向が、同性の親友同士の間でもみられた。

Walster *et al.* (1978-a) は、親密な関係を親友関係、恋愛関係、および親子関係の3タイプに分けて論じている。恋愛・夫婦関係に限定されている従来の研究知見の

- 1) 本論文作成にあたり、名古屋大学文学部辻敬一郎教授に御指導を賜った。また、本論文の概要は第33回名古屋社会心理学研究会で発表されたが、その際、名古屋大学教育学部原岡一馬教授、教養部長田雅喜教授をはじめとする諸先生方から貴重な御示唆を頂いた。いずれも明記して、深く謝意を表します。
- 2) 本論文での調査は、筆者の下で、堀ますみ嬢(社会学科昭和61年度卒業、現在、河合塾岐阜校勤務)が卒業論文研究のために計画・実施した。なお、調査実施の際には、静岡産業技術専門学校に御協力を頂いた。

一般化のために、同性親友との関係への衡平理論の適用可能性を検討する必要がある。

前述したように、先行諸研究では、苦悩の指標として、自他のインプットとアウトカムを思い浮かべたときの4つの気分評定に基づく合成得点 TMI が用いられている。諸井・小川 (1987) は、この TMI の内的整合性が低いことを見出し、4つの気分が単一次元上にあることを示唆した。先の Homans (1974) によると、怒りが過小利得者、罪責感が過大利得者、満足感が衡平利得者の情動の特徴である。したがって、4つの気分は、衡平性の認知に1次元的に関わる気分ではなく、3次元上にあると考えられる。従来の研究では曖昧にされている衡平性の認知に伴って生じる情動の次元について明確にすべきであろう。

ところで、Rubin (1973) によれば、交換原理は対人的絆が強固になった段階よりも関係進展の初期段階によくあてはまる。Walster *et al.* (1978-a) は、短期の関係のほうが、1) 自他のインプットおよびアウトカムの査定が容易であり、2) 具体的、特殊なものが交換されるので査定の値が明確である、という理由で、つきあいの浅い関係のほうが衡平計算が簡単であると提起している。したがって、つきあいの浅い関係にのみ、衡平理論が適用可能であると考えられる。

Lloyd, Cate, & Henton (1982) は、男女大学生を対象として、親密な関係よりもつきあいの浅い関係のほうで TMI に対する衡平性の予測力が高いことを認めた。夫婦を被験者とした Matthews & Clark (1982) の研究では、自己に対する相手の理解・受容についての認知が希薄であるときにのみ、衡平性の認知と関係満足度との間に2次的関係が生じた。前述したように、諸井・小川 (1987) の研究でも、とくに異性親友との関係で衡平性の認知と交際期間との間の交互作用が見出されている。直接に衡平性の問題を扱っているわけではないが、Murstein, Cerreto, & MacDonald (1977) も以上の研究と一致した知見を提出している。社会的交換志向の強い者同士の組み合わせは、夫婦関係には結婚上の不適応をもたらす(ただし、夫のみ)、大学生の同性友人関係ではむしろ友情を高めた。

しかし、関係進展の初期段階でのみ衡平理論が適用可能であるという考えやそれを支持する研究知見は、恋愛・夫婦関係を対象とした先行諸研究での結果と矛盾する。この2者の関係進展度の影響は衡平理論にとって重要な問題といえる。

Deutsch (1982) が連帯性志向集団における平等分配選好を指摘しているように、報酬分配研究で得られた

従来の知見に基づくと、親密な関係では衡平性よりもむしろ自他のアウトカムの一致度である平等性のほうが支配的であると考えられる。Cate, Lloyd, Henton, & Larson (1982) は TMI, Michaels, Edwards, & Acock (1984) は関係満足度について、衡平性とともに関係性も予測子となり得ることを見出した。既婚の男女大学生を被験者とする Peterson (1981) の研究では、衡平利得者のうちアウトカムに加えインプットも自他同一である者の幸福感および関係の安定性が高かった。

ところで、衡平性と平等性の重複を指摘した研究がいくつかある。Cate *et al.* (1982), Walster *et al.* (1978-b——Cate *et al.*, 1982 による再分析), および諸井・小川 (1987) の研究では、衡平性と平等性との重複率(衡平であると同時に平等, 不衡平であると同時に不平等)がかなり高かった。また, Michaels *et al.* (1984), および諸井・小川 (1987) は不衡平値と不平等値との間に極めて高い相関を認めた。この衡平性と平等性の重複の問題は衡平理論の適用妥当性にとって重要である。

本研究では、衡平性の認知に伴う情動が3次元であることを確認し、次のように定式化した衡平仮説の検討を試みる。

仮説 I : 満足感は、衡平利得者の特徴であり、2者の関係が不衡平であると認知するほど、満足感が低下する。

仮説 II : 怒りは、過小利得者の特徴である。

仮説 III : 罪責感は、過大利得者の特徴である。

2者の関係の安定性、相手に対する感情についても、仮説 I と同様な傾向が予測される。さらに、本研究では、1) 衡平性の認知と情動の状態との関係におよぼす2者の関係進展度の影響、および2) 衡平性と平等性との重複の問題についても検討を加える。

なお、本研究では、男女大学生を対象とするが、同年代の専門学校生にも同様の調査を行い(ただし、女子)、大学生で得られた結果の一般化を試みる。

方 法

調査対象および調査の実施

国立大学の教養部、およびコンピューター系の専門学校で“心理学”を受講している1, 2年生を対象に調査を実施した。調査は、“友だち同士の間でのやりとり”に関する基礎的データ収集のための調査であるとして、1986年6月中旬に行った。

大学生では、回答方法に誤りのあった者を除く152名を分析対象とした(男子68名, 女子84名)。専門学校生については男子が少数のため女子70名のデータを採用した。なお、以下の記述では大学一男子, 大学一女子, および

専門一女子と略記する。

質問紙の構成

同性の“最も親しい友だち”1名のイニシャルを記入させ、その人との関係に関する質問に回答させた。

(1) 衡平性の査定尺度

自分と相手との関係を維持する上でのそれぞれの貢献（インプット）、および両者の関係からそれぞれが得ているもの（アウトカム）について“+4”から“-4”までの8点尺度で評定させた。“かなり貢献している”，“かなり得ている”を“+4”とし，“ほとんど貢献していない”，“ほとんど得ていない”を“-4”とした。

(2) 情動的状态

① 衡平性の認知に伴う情動：両者のインプットおよびアウトカムについて考えたときの気分について，“かなり感じる”を“5”とし，“ほとんど感じない”を“1”とする5点尺度で評定させた。本研究では，“怒り”項目として、腹立たしさ、怒り、いらだたしさ、いきどおり，“罪責感”項目として、申し分けなさ、罪悪感、うしろめたさ、やましさ，“満足感”項目として、満足感、幸福感、喜び、楽しさ、を用いた。

② Love & Liking 尺度 (Rubin, 1970): 18項目から成る簡約版を用い、各項目に対して“かなりあてはまる”を“5”，“ほとんどあてはまらない”を“1”とする5点尺度で評定させた。Rubin (1970) によれば、この尺度は愛情度下位尺度（9項目）と好意度下位尺度（9項目）とから構成される。

なお、気分評定尺度および Love & Liking 尺度では、項目の順序効果をなくすために、項目順序の異なる4つのタイプの尺度を用いた。

(3) その他

① 2者の関係の親密さイメージ：2つの円が完全に交わっている段階(5)から完全に分離している段階(1)までの5段階の図を呈示し、2つの円の一方を自分、他方を相手として、2者の関係のイメージに最も近いものを選

択させた。

② 交際期間：交際期間の長さの効果を検討するために、その親友とつきあいを始めてからの期間について尋ねた。

③ 関係の安定性：交際継続についての自己と相手との意志、および予測の3項目について、それぞれ5点尺度で評定させた。得点は安定性が高いほど高得点になるようにした（1点～5点）。

結 果

被験者の選別

自他のインプット、アウトカムの査定値に基づき、以下に示す Walster *et al.* (1978-b) と同じ方法を用いて、不衡平値を算出した。

$$\bar{O}_P = I_P + \frac{|I_P|^{K_P} \times (O_O - I_O)}{|I_O|^{K_O}} \quad \text{不衡平値} = \frac{O_P - \bar{O}_P}{|I_P|}$$

\bar{O}_P : 被験者にとって衡平なアウトカム値

O_P, I_P : 被験者自身のアウトカムとインプットの査定値

O_O, I_O : 親友のアウトカムとインプットに関する査定値

K_P, K_O : +1か-1のべき指数

$$K_P = \text{sign}(I_P) \times \text{sign}(O_P - I_P)$$

$$K_O = \text{sign}(I_O) \times \text{sign}(O_O - I_O)$$

この不衡平値の分布を考慮して、過小利得群、衡平利得群、若干過大利得群、および極端な過大利得群に被験者を分割した。その結果を Table 1 に示す。なお、本研究では、それぞれ、UB 群、EQT 群、SOB 群およびEOB 群と略記する。過小利得者は、諸井・小川 (1987, 82人中2人) に比べ、若干多かった。以下の分析においては、大学生ではこの4群の比較によって、専門一女子では UB 群を除く3群の比較によって、衡平理論の妥当性を検討する。

Table 1 不衡平値に基づく被験者の選別

		<大学-男子>		<大学-女子>		<専門一女子>	
		N	得点範囲 [中央値]	N	得点範囲 [中央値]	N	得点範囲 [中央値]
過小利得群	(UB)	13	-4.00~-0.25 [-0.88]	10	-5.00~-0.25 [-0.46]	6	-1.50~-0.11 [-0.48]
衡平利得群	(EQT)	17	0 [0.00]	44	0 [0.00]	33	0 [0.00]
若干過大利得群	(SOB)	23	+0.17~+3.33 [+0.50]	17	+0.25~+3.00 [+1.01]	16	+0.33~+3.00 [+0.53]
極端な過大利得群	(EOB)	15	+3.50~+27.00 [+6.00]	13	+3.50~+13.00 [+6.00]	13	+3.50~+13.00 [+6.00]

交際月数と親密さイメージ評定との関係をみたところ、相関が小さかったので (*Spearman* の順位相関: 大学一男子 .143, *n.s.*; 大学一女子 .251, $p=.021$; 専門一女子 $-.025$, *n.s.*), 本研究では両測度は別個のものとして扱うことにした。交際期間については, 大学一女子よりも専門一女子のほうで交際期間が長かったが (*M-W* 検定, $z=2.17$, $p=.030$), 大学一男子と大学一女子および専門一女子それぞれの間には差がなかった。親密さイメージについては, 大学2サンプル間には差がなかったが, 専門一女子で他の2サンプルよりもイメージが肯定的であった (大学一男子: $z=2.96$, $p=.003$; 大学一女子: $z=2.02$, $p=.043$)。

交際月数, 親密さイメージの評定のそれぞれの分布に基づき, 被験者を短期および長期交際群, 低親密イメージおよび高親密イメージ群に分割した。交際期間については, 大学生では, 38カ月以上を長期群, 37カ月以下を短期群とし, 専門一女子では, 39カ月以上, 38カ月以下を同様にした。また, 親密さイメージについては, 大学生では, 2円の交わりの大きいほうから3段階を高親密イメージ群, 残りの2段階を低親密イメージ群とし, 専門一女子では大きいほうから2段階, 残りの3段階を同様にした。

情動的状態および関係の安定性に関する尺度の検討

① 衡平性の認知に伴う情動次元: 12個の気分項目について因子分析 (主因子法) を行った。固有値 ≥ 1.00 で因子数を決め, 直交回転後の因子負荷量 .400 を基準として因子の解釈をした。Table 2 に大学生全体と専門一女子での因子分析の結果を示す。

大学生では, 男女で類似した結果が得られ, 最初の設定通りに3因子が抽出された (説明率: 69.2%; 因子間の類似度: 第I因子 .989, 第II因子 .951, 第III因子 .952)。第I因子は“満足感”因子, 第II因子は“怒り”因子, 第III因子は“罪責感”因子と命名できる。したがって, それぞれに該当する4項目の単純合計得点を各因子の得点とした (満足感: 大学一男子 $\alpha=.903$, 大学一女子 $\alpha=.880$; 怒り: それぞれ, .833, .820; 罪責感: それぞれ, .772, .805)。

ところが, 専門一女子では, 同様な3因子が抽出されたが (説明率: 67.5%), うしろめたさとやましさは“怒り”因子と“罪責感”因子とに重複していた。したがって, 満足感と怒りの得点は大学生と同様に算出し, “罪責感”因子については申し分けなさや罪悪感の単純合計得点をその得点とした (満足感: $\alpha=.828$; 怒り: $\alpha=.832$, 罪責感: $\alpha=.606$)。

なお, すべてのサンプルで, 満足感と他の2つの情動

Table 2 衡平性の認知に伴う情動に関する因子分析の結果
—主因子法, 直交回転後の因子負荷量—

	I	II	III	h^2
1. 腹立たしさ	-.068 <.859>	.882 <-.117>	.105 <.121>	.794 <.766>
2. 申し分けなさ	.061 <.126>	.071 <-.005>	.764 <.662>	.592 <.454>
3. 満足感	.774 <-.055>	-.081 <.757>	-.146 <-.058>	.627 <.579>
4. 幸福感	.863 <-.179>	-.097 <.828>	-.035 <.055>	.755 <.721>
5. 怒り	-.011 <.743>	.767 <.024>	.065 <.154>	.593 <.576>
6. 罪悪感	-.095 <.335>	.169 <.163>	.715 <.533>	.549 <.423>
7. 喜び	.887 <.012>	-.018 <.766>	-.073 <.133>	.792 <.605>
8. いらだたしさ	-.077 <.714>	.700 <-.103>	.285 <.247>	.577 <.581>
9. うしろめたさ	-.112 <.477>	.185 <-.328>	.727 <.521>	.575 <.607>
10. 楽しさ	.757 <.014>	.003 <.629>	-.044 <-.104>	.575 <.407>
11. いきどおり	-.026 <.589>	.536 <-.004>	.266 <.159>	.359 <.372>
12. やましさ	-.185 <.617>	.265 <-.068>	.528 <.569>	.383 <.709>
因子寄与率 (%)	26.7 <28.9>	22.2 <23.9>	20.3 <14.7>	

上段: 大学生; < >内: 専門一女子
因子負荷量の小数点は省略してある。

とは無関係であったが, 怒りと罪責感の間には有意な正の相関が得られた (*Pearson* の相関——満足感—怒り: 大学一男子 $-.162$, 大学一女子 $-.090$, 専門一女子 $-.116$, すべて *n.s.*; 満足感—罪責感: それぞれ, $-.193$, $-.156$, $.057$, すべて *n.s.*; 怒り—罪責感: それぞれ, $.263$, $p=.030$, $.479$, $p=.001$, $.378$, $p=.001$)。これは, 怒りと罪責感がいずれもネガティブな情動であるためであろう。

② Love & Liking 尺度: Rubin (1970) によれば, この尺度は愛情度下位尺度と好意度下位尺度とから構成される。同性親友を対象とする本研究でも, 因子分析によって愛情度および好意度因子が確認されたので, 当該下位尺度項目の合計得点を愛情度および好意度とした (愛情度: 大学一男子 $\alpha=.844$, 大学一女子 $\alpha=.849$, 専門一女子 $\alpha=.883$; 好意度: それぞれ, $.876$, $.826$, $.817$)。得点が高いほど相手に対する愛情度あるいは好感度が高い (9点~45点)。

Table 3 情動的状態および関係の安定性に関する条件別平均値
—被験者の性×衡平性×交際期間—

		〈大学—男子〉 — 衡平性の認知 —				〈大学—女子〉 — 衡平性の認知 —			
		UB	EQT	SOB	EOB	UB	EQT	SOB	EOB
N	短期	8	6	12	7	4	22	9	7
	長期	5	11	11	8	6	22	8	6
怒り	短期	5.88	5.00	7.42	5.29	7.00	5.82	5.11	7.57
	長期	7.40	5.18	6.36	6.00	8.00	5.59	6.38	5.67
罪責感	短期	5.63	5.00	6.83	8.14	5.75	5.59	6.67	9.71
	長期	7.20	4.09	6.27	6.75	6.17	5.82	6.25	7.00
満足感	短期	16.50	15.33	14.83	15.43	13.50	16.86	17.33	14.43
	長期	14.60	14.73	16.09	16.63	16.67	16.68	17.50	16.33
関係の安定性	短期	13.38	12.50	12.67	11.71	13.75	13.77	13.56	12.00
	長期	11.80	14.36	14.18	12.88	14.00	14.41	14.13	13.83
愛情度	短期	24.75	18.83	23.83	23.00	29.00	29.09	29.33	27.43
	長期	24.60	23.27	22.64	24.63	32.00	31.41	32.25	35.00
好意度	短期	29.50	33.00	32.08	33.00	31.25	31.45	32.11	31.14
	長期	29.20	26.55	28.36	32.88	31.17	32.23	32.38	37.17

Table 4 情動的状態および関係の安定性に関する条件別平均値
—被験者の性×衡平性×親密さイメージ—

		〈大学—男子〉 — 衡平性の認知 —				〈大学—女子〉 — 衡平性の認知 —			
		UB	EQT	SOB	EOB	UB	EQT	SOB	EOB
N	低親密	6	5	14	5	3	14	5	5
	高親密	7	12	9	10	7	30	12	8
怒り	低親密	5.67	6.60	7.86	4.60	8.67	4.93	4.60	6.20
	高親密	7.14	4.50	5.44	6.20	7.14	6.07	6.17	7.00
罪責感	低親密	5.33	4.00	7.14	8.00	6.67	5.43	5.60	9.00
	高親密	7.00	4.58	5.67	7.10	5.71	5.83	6.83	8.13
満足感	低親密	16.67	14.80	15.21	15.60	12.67	16.43	17.60	13.00
	高親密	15.00	15.00	15.78	16.30	16.57	16.93	17.33	16.75
関係の安定性	低親密	12.33	13.00	13.21	11.20	14.00	13.79	12.80	11.60
	高親密	13.14	14.00	13.67	12.90	13.86	14.23	14.25	13.63
愛情度	低親密	24.50	20.40	21.86	22.60	22.33	28.86	27.00	28.20
	高親密	24.86	22.25	25.44	24.50	34.43	30.90	32.25	32.63
好意度	低親密	28.33	27.00	30.07	33.20	29.67	31.07	30.00	35.00
	高親密	30.29	29.58	30.67	32.80	31.86	32.20	33.17	33.25

③関係の安定性： 交際継続についての3項目の合計得点を関係の安定性とした（大学—男子 $\alpha = .746$ ，大学—女子 $\alpha = .651$ ，専門—女子 $\alpha = .795$ ）。得点は安定性が高いほど高得点になるようにした（3点～15点）。

情動的状態および関係の安定性

大学生および専門—女子別に、情動的状態および関係の安定性に関する各測度について、交際期間と親密さイメージの効果それぞれを含めた2通りの分散分析を行った。

A. 大学生

分析Iでは、交際期間、被験者の性、衡平性（1次、2次、3次傾向）の主効果、交際期間×被験者の性、交際期間×衡平性（1次、2次、3次傾向）、被験者の性×衡平性（1次、2次、3次傾向）、交際期間×被験者の性×衡平性（1次、2次、3次傾向）の交互作用を求めた。分析IIでは交際期間の代わりに親密さイメージを投入した。Table 3, 4に条件別平均値を示す。

セル内の人数が不均等であるため、一括投入型回帰的分析法を用い、各群での不衡平値の中央値を考慮して、

各平衡群の間隔を(1, 2, 3, 8)とした。交互作用が有意であったときは下位検定を行った。なお、主効果、交互作用、下位検定いずれも $df=1/136$ である。

(1) 分析 I

①怒り： 平衡性の3次傾向のみが有意であり ($F=4.74, p=.031$)、平衡仮説と一致して UB 群で最も高く、EQT 群で最も低かった。しかし、SOB 群、EOB 群でも中程度に怒りを感じていた。

②罪責感： 平衡性の1次および3次傾向が有意であり ($F=10.04, p=.002; F=4.72, p=.032$)、平衡仮説と一致して、過大利得になるほど罪責感が高くなるが、UB 群でも少し高かった。さらに、交際期間×平衡性の1次傾向の交互作用で傾向性が得られ ($F=3.61, p=.060$)、短期群でのみ1次傾向がみられた ($F=13.88, p=.001$)。

③満足感： 性×平衡性の2次傾向の交互作用の傾向性があり ($F=3.69, p=.057$)、女子でのみ、平衡仮説とほぼ一致して、EQT 群、SOB 群を頂点とする逆U字型を示した ($F=6.32, p=.013$)。また、交際期間×性×平衡性の2次傾向の交互作用で傾向性を示し ($F=3.53, p=.062$)、女子の短期群で、EQT 群、SOB 群の満足感が高かった ($F=6.69, p=.011$)。

④関係の安定性： 交際期間および性の有意な主効果があり ($F=8.17, p=.005; F=7.45, p=.007$)、短期群よりも長期群のほうが、男子よりも女子のほうが、それぞれ安定性が高かった。また、平衡性の1次傾向の主効果が有意で、2次傾向の主効果でも傾向性があったが ($F=5.86, p=.017; F=3.27, p=.073$)、同時に、交際期間×平衡性の1次傾向、交際期間×平衡性の2次傾向、交際期間×性×平衡性の2次傾向の交互作用も傾向性を示した ($F=3.63, p=.059; F=3.31, p=.071; F=3.78, p=.054$)。短期群では、UB 群、EQT 群の安定性が高い1次傾向がみられるのに対して ($F=9.96, p=.002$)、長期群では EQT 群、SOB 群が高い2次傾向があった ($F=8.94, p=.003$)。さらに、性を考慮すると男子の長期群でのみ、EQT 群、SOB 群が高い2次傾向があった ($F=9.53, p=.002$)。

⑤愛情度： 交際期間および性の有意な主効果があり ($F=5.39, p=.022; F=45.96, p=.001$)、短期群よりも長期群のほうが、男子よりも女子のほうが、それぞれ愛情度が高かった。

⑥好意度： 平衡性の1次傾向の主効果が有意であり ($F=4.56, p=.035$)、過大利得状態になるほど好意度が高まった。また、交際期間×性の交互作用が有意であり、男子では長期群よりも短期群のほうが好意度が高かった

($F=3.97, p=.048$)。

(2) 分析 II

①怒り： 分析 I と同様に平衡性の3次傾向で傾向性があった ($F=2.79, p=.097$)。その他、性×平衡性の2次傾向の交互作用で傾向性が得られ ($F=3.87, p=.051$)、親密さイメージ×性×平衡性の2次傾向の交互作用も有意であった ($F=6.25, p=.014$)。前者は、女子でのみ EQT 群、SOB 群の怒りが低いU字型が生じることを示し ($F=3.23, p=.074$)、後者は、男子の低親密イメージ群では、EQT 群、SOB 群の怒りが高い逆U字型が生じるのに、女子の低親密イメージ群ではU字型傾向があることを示している ($F=5.91, p=.016; F=4.92, p=.028$)。

②罪責感： 分析 I と同様に平衡性の1次傾向と3次傾向とが有意であった ($F=11.48, p=.001; F=4.51, p=.036$)。

③満足感： 分析 I と同様に性×平衡性の2次傾向の有意な交互作用が得られ ($F=5.70, p=.018$)、女子でのみ逆U字型の傾向があった ($F=6.47, p=.012$)。その他、親密さイメージの主効果で傾向性が得られ ($F=3.06, p=.082$)、低親密イメージ群よりも高親密イメージ群のほうが満足感が高かった。また、親密さイメージ×性の交互作用で傾向性が認められ ($F=3.39, p=.068$)、女子でのみ高親密イメージ群のほうが満足感が高かった ($F=5.96, p=.016$)。さらに、親密さイメージ×性×平衡性の2次傾向の有意な交互作用があり ($F=4.51, p=.035$)、女子の低親密イメージ群でのみ EQT 群、SOB 群を頂点とする逆U字型傾向があった ($F=7.18, p=.008$)。

④関係の安定性： 分析 I と同様に性の主効果、平衡性の1次傾向があった ($F=4.00, p=.048; F=9.64, p=.002$)。その他、親密さイメージの有意な主効果が得られ ($F=10.88, p=.001$)、低親密イメージ群よりも高親密イメージ群のほうが安定性が高かった。また、親密さイメージ×平衡性の1次傾向の交互作用で傾向性が認められ ($F=3.17, p=.077$)、EOB 群での安定性が低い1次傾向が高親密イメージ群よりも ($F=3.64, p=.059$)、低親密イメージ群で顕著であった ($F=8.45, p=.004$)。

⑤愛情度： 分析 I と同様に性の主効果が有意であった ($F=30.76, p=.001$)。その他、親密さイメージの有意な主効果が得られ ($F=12.12, p=.001$)、高親密イメージ群のほうが愛情度が高かった。また、親密さイメージ×性の交互作用で傾向性が認められ ($F=3.17, p=.077$)、女子でのみ低親密イメージ群よりも高親密イメージ群のほうが愛情度が高かった ($F=22.27, p=.001$)。

⑥好意度： 分析 I と同様に平衡性の1次傾向の有意な主効果があった ($F=5.35, p=.022$)。

Table 5 情動の状態および関係の安定性に関する条件別平均値
—— 専門—女子 ——

N	短期 長期	〈交際期間〉 — 衡平性の認知 —			低親密 高親密	〈親密さイメージ〉 — 衡平性の認知 —		
		EQT	SOB	EOB		EQT	SOB	EOB
		21 12	6 10	6 9		21 12	11 5	11 4
怒り	短期 長期	6.38 7.92	7.00 8.20	8.33 9.00	低親密 高親密	7.14 6.58	7.91 7.40	9.00 8.00
罪責感	短期 長期	3.76 3.42	2.83 4.20	4.67 3.56	低親密 高親密	3.52 3.83	4.00 3.00	3.91 4.25
満足感	短期 長期	16.67 15.83	15.33 16.90	16.33 16.89	低親密 高親密	16.29 16.50	15.91 17.20	17.09 15.50
関係の 安定性	短期 長期	13.67 14.25	11.67 13.60	12.83 13.67	低親密 高親密	13.57 14.42	12.55 13.60	13.36 13.25
愛情度	短期 長期	30.90 30.67	30.67 30.90	32.33 32.33	低親密 高親密	28.48 34.92	28.73 35.40	34.64 26.00
好意度	短期 長期	30.29 30.58	32.00 33.40	30.83 32.89	低親密 高親密	30.05 31.00	33.18 32.20	33.09 29.25

B. 専門女子

分析 I では、交際期間、衡平性（1次、2次傾向）の主効果、交際期間×衡平性（1次、2次傾向）の交互作用を求め、分析 II では、交際期間の代わりに親密さイメージを投入した。Table 5 に条件別平均値を示す。なお、各衡平群の間隔は（1，2，7）とし、一括投入型回帰的分析法を用いた。主効果、交互作用いずれも $df=1/58$ である。

(1) 分析 I

罪責感について、交際期間×衡平性の2次傾向の交互作用で傾向性があり ($F=3.08, p=.085$)、短期群でU字型、長期群で逆U字型の傾向を示したが、下位検定は有意でなかった。関係の安定性では、交際期間および衡平性の2次傾向の有意な主効果が得られ ($F=7.22, p=.009; F=6.93, p=.011$)、短期群よりも長期群のほうが、EQT 群が他の2群に比べ、それぞれ、安定性が高かった。

(2) 分析 II

愛情度では、親密さイメージ×衡平性の1次傾向の有意な交互作用があった ($F=14.95, p=.001$)。過大利得状態になるほど、愛情度が、低親密イメージ群では高まるのに ($F=9.74, p=.003$)、高親密イメージでは低くなった ($F=10.08, p=.002$)。

衡平性と交際期間および親密さイメージ

過小利得者を除き、不衡平値と交際月数との関係をみたが、専門—女子でのみ交際期間の短いほうが衡平利得状態である正の相関の傾向性があった (*Spearman* の順位相関：専門—女子 .231, $p=.066$)。次に本研究での

選別基準に基づき両者の関係をみると (Table 3 参照)、専門—女子で同様な傾向が認められた (*Kendall* の c 係数：専門—女子 .243, $p=.034$)。衡平性と親密さイメージについても同様な分析をしたが、有意な傾向あるいは傾向性は得られなかった。

衡平性と平等性

衡平性と平等性との重複率は、大学—男子では83.8% (衡平—平等17人、不衡平—不平等40人、衡平—不平等0人、不衡平—平等11人、ただし不衡平—不平等のうち2人は利得の方向が逆である)、大学—女子では84.5% (それぞれ、44人、27人、0人、13人、ただし不衡平—不平等のうち1人は利得の方向が逆である)、専門—女子では90.0% (それぞれ、30人、33人、3人、4人、ただし不衡平—不平等のうち3人は利得の方向が逆である)であった。なお、3サンプル間の重複率に差がなかった。また、不衡平値と不平等値との間にも高い相関があった (*Spearman* の順位相関：大学—男子 .834, 大学—女子 .744, 専門—女子 .641, いずれも $p=.001$)。これらは、異なる概念である衡平性と平等性とが現実の認知において区別されないことを示している。

次に、衡平分配および平等分配の出現率をみると、大学—男子では衡平25.0%、平等41.2%、大学—女子では52.4%、67.9%、専門—女子では47.1%、48.6%であった。衡平分配の出現率では、大学—女子と専門—女子との間に差はなかったが、大学—男子に比べ両女子サンプルの出現率が有意に高かった (大学—女子: $\chi^2_{(1)}=11.73, p=.001$; 専門—女子: $\chi^2_{(1)}=7.32, p=.007$)。平等分配の出現率では、大学—女子の出現率が他の2サンプルに

比べ有意に高かったが(大学一男子： $\chi^2_{(1)}=10.85$, $p=.001$; 専門一女子： $\chi^2_{(1)}=5.87$, $p=.015$)、大学一男子と専門一女子との間に差はなかった。

衡平分配と平等分配との同時出現率は、大学一男子25.0%、大学一女子52.4%、専門一女子42.9%であり、大学一女子と専門一女子との間に差はなかったが、大学一男子に比べ両女子サンプルの出現率が有意に高かった(大学一女子： $\chi^2_{(1)}=11.73$, $p=.001$; 専門一女子： $\chi^2_{(1)}=4.90$, $p=.027$)。したがって、日本人の平等性指向がアウトカムのみでなくインプットの平等化をも伴う特徴的傾向をもつという諸井・小川(1987)の知見は、女子に限定されるといえよう。

考 察

衡平性の認知に伴う情動次元

気分評定の因子分析の結果は、Homans(1974)の提起と一致して、衡平性の認知に伴う情動が、満足感、怒り、および罪責感の3因子から成ることを示した。しかし、専門一女子の因子分析の結果、および女子における怒りと罪責感との相関の大きさをみると、怒りと罪責感の2因子についてはさらに検討が必要といえる。

ところで、本研究では、衡平仮説に反して、罪責感が過小利得者で、怒りが過大利得者で、それぞれ少し高まる傾向が認められた。これらは、自己の利得状態よりも、むしろ相手を不衡平状態に陥らせたことに対する情動の反映と解釈できるかもしれない。また、もともと予測された過小利得者の怒り、および過大利得者の罪責感についても、前者が相手からの返報期待、後者が相手に対する感謝の念として、関係継続への動機づけの側面をもつことが考えられる。したがって、衡平性の認知に伴う情動を、単なる付随的なものとしてよりも、2者関係の継続・終結への動機づけの観点から把握すべきであろう。

関係の進展段階と衡平理論の適用可能性

本研究の結果は、衡平仮説が交際期間や親密さイメージによって限定されることを示した。

まず、関係の進展段階によって衡平原理の適用可能性が異なるかについて検討しよう。関係進展の初期段階のほうが衡平仮説が妥当である証拠として、1)大学生の短期群での過大利得になるほど罪責感が高まる1次傾向、2)大学一女子の短期群および低親密イメージ群での、EQT群、SOB群を頂点とする満足感の2次傾向、を挙げることができる。逆に、関係が進んだ段階のほうが衡平仮説が妥当である証拠として、1)男子の長期群でのEQT群、SOB群を頂点とする関係の安定性の2次傾向、2)専門一女子の高親密イメージ群での、過大利得にな

るほど愛情度が低くなる1次傾向、を挙げることができる。その他、衡平仮説と一致しないが、1)大学一男子の低親密イメージ群での、EQT群、SOB群を頂点とする怒りの2次傾向、2)大学一女子の低親密イメージ群でのEQT群、SOB群を谷とする怒りの2次傾向、という関係の進展段階に関する効果がみられた。

大学一男子では、過大利得者の罪責感が衡平仮説と一致して関係進展の初期段階で生じるが、2者関係の安定性については関係が進んだ段階で衡平原理が適用される。しかし、2者が一体化していない段階での衡平状態はむしろ怒りを引き起こす。大学一女子では、UB群での怒りが相手に、EOB群での怒りがむしろ自己に向けられたものと解すれば、一般的に、関係進展の初期段階で衡平原理が適用されるといえよう。この性差は、報酬分配における性差と同様に(Major & Deaux, 1982 参照)、男女の志向性の差異によって解釈できるかもしれない。男子は、課題志向的であり、衡平な同性友人関係の確立を目標とする。したがって、関係が進化した段階での衡平状態からの逸脱はネガティブな情動を引き起こしやすい。一方、女子は、人間関係志向的であり、交換原理によって支配されない同性友人関係を理想とする。そのため、関係が進化するほど衡平性の認知と情動との関係が希薄になる。この解釈の妥当性も含め、今後さらに関係の進展段階の影響を検討すべきであろう。

ところで、専門一女子では愛情度において関係が進んだ段階で衡平原理が適用されることを示す傾向が得られた。ただし、専門一女子では、大学生に比べ、交際期間が長く親密さイメージが肯定的であり、対象とした友だちの水準が異なるといえる。そのため、専門一女子では他の側面において関係の進展段階に関する効果が検出されなかったのかもしれない。しかし、Rubin(1970)の愛情度尺度は、本来、異性に対する感情に関するものであり、2者が一体的な段階では同性関係においても愛情度が衡平性と関わりをもつことは興味ある傾向といえよう。

利得最大原理を支持する証拠として、1)大学生での好意度の1次傾向、2)専門一女子の低親密イメージ群での愛情度の1次傾向、を挙げることができる。ところで、Critelli & Waid(1980)は、20歳前後のカップルで、身体的魅力度を基準とした過大利得者が相手により愛情をもつことを見出した。彼らは、相手への愛情を一種のインプットとして解釈し、衡平理論を支持するとした。本研究での1)、2)の傾向も過大利得状態解消への動機づけと解釈すれば、衡平仮説を支持するといえよう。

ところで、本研究では関係の進展段階の基準として交際期間と親密さイメージを用いた。分析Ⅰおよび分析Ⅱでの交際期間と親密さイメージの有意な主効果は、これらの基準が関係の進展段階を反映していることを示す。しかし、1) 両基準間に強い関係が認められない、2) 分析ⅠおよびⅡで結果に違いがみられる、という点から、これらの基準が関係の進展段階の異なる側面を反映しているといえる。例えば、交際期間が2者のインプットとアウトカムの蓄積の歴史に関連しているのに対して、親密さイメージの測度は2者の心理学的一体化の程度をとらえていると考えられる。

衡平性の認知

本研究では、諸井・小川(1987)と同様に、過小利得者が少数しか出現しなかった。これは、1) 関係終結に伴うコストが大きい恋愛・夫婦関係に比べ、友だち関係の水準では過小利得状態が関係の終結となり易い、2) 衡平性の認知が必ずしもシンメトリーでなく、自分が過大利得状態にあると双方が思い込むほうが関係が継続し易い、などの理由が考えられる。つまり、過小利得状態に伴う怒りが関係崩壊行動の生起となり易いのに対し、過大利得状態に伴う罪責感や相手への感謝の念を生じて、関係継続につながる返報行動となるからである。

ところで、Hatfield, Utne, & Traupmann (1979) は、“カップルの結婚期間が長期になるほど、誰もがその関係が衡平であると知覚する”という仮説を提起している。諸井・小川(1987)の研究では、大学一女子の同性親友で、交際が長期の場合に衡平利得者が多く出現していた。しかしながら、専門一女子に限られていたが、交際期間の短いほうが衡平利得状態である傾向が本研究で得られた。したがって、Hatfield *et al.* (1979) の仮説の当否について明確な結論を下すことはできない。ただし、諸井・小川(1987)と本研究で得られた有意な相関はそれほど強くなかった。このことを考えると、友だち関係の水準では交際期間と衡平性との間に明確な関係が認められないといえるかもしれない。先述したように関係終結のコストが大きい恋愛・夫婦関係と異なり、関係終結が比較的容易である友だち関係では必ずしも衡平な方向に関係が収斂していかないからである。

Cate *et al.* (1982)、および諸井・小川(1987)の研究で指摘された衡平性と平等性の重複は、大学生、および専門一女子のいずれでもみられた。これには、1) 異なる概念として提起されている衡平性と平等性の区別が現実には行われていない、2) Walster *et al.* (1978-b) に従って4つの成分を査定させる方法に問題がある、ことが考えられる。1) については、報酬分配研究では衡

平分配と平等分配の区別が現実に行われている証拠が得られていることから (Deutsch, 1982)、この重複が本研究で扱っている関係の水準に特有であると考えたほうが妥当かもしれない。しかし、2) については、被験者による評定の視覚的調整の可能性 (Michaels *et al.*, 1984) もあるが、比率的概念である衡平性の間隔尺度による査定も問題であるかもしれない。

今後の課題

本研究では、関係の進展段階に関する効果として、3サンプルでそれぞれ固有の傾向が認められた。衡平性の認知に伴う情動を2者関係への動機づけの側面から再吟味するとともに、そのような関係進展に伴う変化の様相について今後さらに検討する必要がある。また、先行研究や本研究で認められた衡平性と平等性の重複は、衡平性の査定および衡平公式の問題 (諸井・小川, 1987参照) も含め、引き続き検討すべきであろう。

ところで、本研究で扱った“友だち”という水準での関係は、閉鎖的關係として特徴づけられる夫婦・恋愛関係と対照的に、複数の関係を伴うものである。したがって、人が当該の時間範囲内での自己の関係全体において衡平を維持するという見解、すなわち“世界に対する衡平 (equity with world)” 仮説 (Austin & Walster, 1975) に関連づけて“友だち”水準における関係を検討することも必要であろう。

引用文献

- Austin, W., & Walster, E. 1975 Equity with the world: The trans-relational effects of equity and inequity. *Sociometry*, 38, 474-496.
- Cash, T. F., & Derlega, V. J. 1978 The matching hypothesis: Physical attractiveness among same-sexed friends. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 240-243.
- Cate, R.M., Lloyd, S.A., Henton, J.M., & Larson, J.H. 1982 Fairness and reward level as predictors of relationship satisfaction. *Social Psychology Quarterly*, 45, 177-181.
- Critelli, J.W., & Waid, L.R. 1980 Physical attractiveness, romantic love, and equity restoration in dating relationships. *Journal of Personality Assessment*, 44, 624-629.
- Deutsch, M. (古畑和孝訳) 1982 公正の社会心理学 三隅二不二・木下富雄(編) 現代社会心理学の発展 I ナカニシヤ出版, Pp.100-128.
- Hatfield, E., Utne, M. K., & Traupmann, J. 1979 Equity theory and intimate relationships. In R.L. Burgess & T.L. Huston (Eds.), So-

- cial exchange in developing relationships.* Academic Press. Pp.99-133.
- Homans, G. C. 1974 *Social behavior: Its elementary forms.* Harcourt Brace Jovanovich. (社会行動—その基本形態— 橋本 茂訳 誠信書房, 1978)
- 井上和子 1985 恋愛関係における Equity 理論の検証 実験社会心理学研究, 24, 127-134.
- 井上和子 1986 2人きょうだいにおける Equity と関係の認知 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 440-441.
- Lloyd, S., Cate, R., & Henton, J. 1982 Equity and rewards as predictors of satisfaction in casual and intimate relationships. *Journal of Psychology*, 110, 43-48.
- Major, B., & Deaux, K. 1982 Individual differences in justice behavior. In J. Greenberg & R. L. Cohen (Eds.), *Equity and justice in social behavior.* Academic Press. Pp.43-76.
- Matthews, C., & Clark, R. D., III 1982 Marital satisfaction: A validation approach. *Basic and Applied Social Psychology*, 3, 169-186.
- Michaels, J. W., Edwards, J. N., & Acock, A. C. 1984 Satisfaction in intimate relationships as a function of inequality, inequity, and outcomes. *Social Psychology Quarterly*, 47, 347-357.
- 諸井克英・小川久美 1987 対人関係への衡平理論の適用—予備的検討— 人文論集 (静岡大学人文学部 社会学科・人文学科研究報告), 37, 15-40.
- Murstein, B. I., Cerreto, M., & MacDonald, M. G. 1977 A theory and investigation of the effect of exchange-orientation on marriage and friendship. *Journal of Marriage and the Family*, 39, 543-548.
- Peterson, C. 1981 Equity, equality, and marriage. *Journal of Social Psychology*, 113, 283-284.
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 265-273.
- Rubin, Z. 1973 *Liking & loving: An invitation to social psychology.* Holt, Rinehart, and Winston. (好きになること 愛すること—社会心理学への招待— 市川孝一・樋野芳雄訳 思索社, 1981)
- Walster, E., Walster, G. W., & Berscheid, E. 1978 -a *Equity: Theory and research.* Allyn and Bacon.
- Walster, E., Walster, G. W., & Traupmann, J. 1978-b Equity and premarital sex. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 82-92.

—1987年11月16日 受稿, 1988年9月24日 受理—

AN APPLICATION OF EQUITY THEORY TO INTERPERSONAL
RELATIONS (2): EQUITY AND EMOTIONAL STATES IN CLOSE
RELATIONSHIPS WITH SAME-SEX FRIENDS

KATSUHIDE MOROI
Shizuoka University

ABSTRACT

This study was designed to test the applicability of equity theory to interpersonal relations. Questionnaires were administered to male and female undergraduates and female technical college students ($N=222$). They were asked to assess equity/inequity and emotional qualities of the relationships with their most intimate friends of same sex. Subjects were divided into casual and intimate relationship groups according to their current state (length of relationship and intimacy image).

The main results were as follows:

1) Varimax rotation of the factor analysis (principal factor solution) on the rated moods produced three factors. They were labeled as "contentment", "anger", and "guilt", respectively. These factors were the same as those posited by Homans (1974).

2) Female undergraduates who perceived themselves as equitably treated felt more content than those who perceived inequitably treated, only in casual relationships.

3) For male undergraduates and female technical college students, the trends as predicted by equity theory were found in intimate relationships.

Key words: equity, social exchange, friendship, casual relationship, intimate relationship.
